



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3191 号 2016.8.17 発行

社説 ホームの安全 多様な乗客いることを 北海道新聞 2016年8月17日
 視覚障害者の男性が東京の地下鉄ホームから落ち、電車にはねられて亡くなった。交通弱者を守る目は十分だったか。障害者、高齢者やベビーカー利用者など多様な乗客を想定して再考すべきだ。

事故は十五日、東京メトロ銀座線の青山一丁目駅で起きた。東京都内に住む男性（55）がホームから線路に転落、すぐに進入してきた電車にはねられた。転落原因はまだよく分かっていないが、警視庁や同社の説明では、男性は盲導犬を連れていた。当初は点字ブロックの上を歩いていたが、線路方向にずれていったという。

転落場所から少し先には柱の列が立ち並び、ホームの幅が狭くなっていた。点字ブロックの上に柱の一部が重なり、男性の進行を阻む形になっていた。盲導犬が障害物を避けようとして男性の体が線路側にそれた可能性もある。

残念なのは、転落を防ぐホームドアが設置されていなかったことだ。視覚障害者が駅ホームから落ちる事故が相次ぎ、国土交通省は五年前、利用者が一日十万人を超える駅にホームドアの設置を求めた。鉄道各社は改修を進めるが、今年三月末までに設置されたのは首都圏や名古屋、京阪神などの都市部や新幹線などの六百六十五駅、十年前の二倍にとどまる。

東京メトロは九路線のうち、ホームドアの設置が終わっていない路線が五つある。今回事故の起きた銀座線はホームが狭くて強度も不足、設置が遅れている。人命が失われてからでは遅い。安全策の要は人の力だ。構造的にホームドアの整備が難しいなら、係員を増やすべきではないか。

同社はまた、来春以降の運行ダイヤ改正で、ホームドアのない半蔵門など五路線の半数の駅で停車時間を五〜十秒延長する。今春、九段下駅で乗務員がベビーカーをドアに挟んだまま走行を続ける事故が起き、その再発防止策だ。ベビーカーに子どもは乗っておらず、最悪事態は免れたが、二度とあってはならない。

都市部の鉄道は過密ダイヤで速さを競いあってきたが、もはや転換期にある。運行時間が延びても乗務員がドア開閉などで十分に安全確認できる時間を確保することの方が大切だろう。

公共の乗り物がだれにとっても利用しやすいものであるのか。交通弱者と呼ばれるのは障害者だけでない。高齢者や妊娠中の女性、ベビーカーを利用する親たち…。鉄道事業者だけでなく、周りの人も見守り、支え合いたい。

盲導犬連れ男性の転落死亡事故 視覚障害者と現場ホームを歩く

東京新聞 2016年8月17日

東京メトロ銀座線青山一丁目駅で十五日、視覚障害者で盲導犬を連れていた品田直人さん（55）がホームから転落し、電車にひかれて死亡した。身近な駅に、どのような危険が潜んでいるのか。目が不自由で、白杖（はくじょう）を使う東京都盲人福祉協会の笹川

吉彦会長（82）と一緒に十六日、現場を歩いた。（谷岡聖史）



点字ブロックをたどり、ホームから改札（手前）へ向かって歩く東京都盲人福祉協会の笹川吉彦会長＝16日、東京都港区の東京メトロ銀座線青山一丁目駅で（朝倉豊撮影）

ホームの幅は三メートル。壁が近く、圧迫感がある。電車が着くと、乗り降りの人で歩きづらい。電車のごう音で話し声も聞こえない。笹川さんが大声を上げた。「音が大きく響くから、電車がどっちから走ってくるのか分からない」

笹川さんは四十年ほど前、ホームから落ちたことがある。JR高田馬場駅で人混みに押され、足元のブロックを見失い、安全な場所に戻ろうとして、誤って線路側に足を踏み出してしまった。「発車直前で、もう終わりだと覚悟した」

この日の青山一丁目駅でも、サングラスをかけ、白杖を手に歩く笹川さんに気付く人は少ない。会話に夢中のカップルは、かかると白杖がぶつかって初めて気付き、スマートフォンを操作しながら歩く女性がぶつかりそうになった。

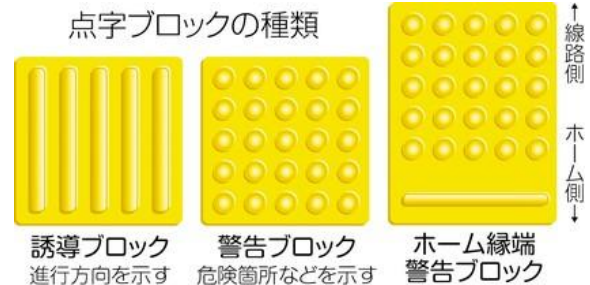
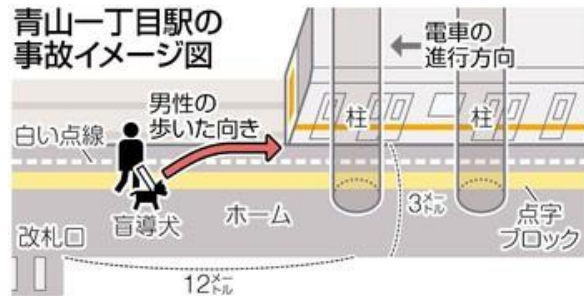
進行方向を示す線状の誘導ブロックを踏みながら歩く。ホームの端一メートル手前で、ブロックの様子が点状に変わった。ここから先は危険と警告するブロックだ。

東京メトロは「警告ブロックは誘導する物ではなく、上を歩くことは想定していない」という。だが、笹川さんは「ブロックに頼って歩きたくなる。ブロックを踏んでいれば、絶対に線路に落ちないから」と明かした。

線路に沿って、死亡した品田さんと同じ方向にホームを歩いた。転落地点を過ぎ、数メートル進むと、体が柱にぶつかった。幅四十センチのブロックの右半分を柱がふさぐ。笹川さんが半歩左にずれた。ホームの端まで六十センチ。電車が通過すれば、かなり危ない。

死亡した品田さんは柱の数メートル手前で転落し、警視庁赤坂署は盲導犬が柱を避けようとした可能性もあるとみて調べている。笹川さんは「駅の構造上、ここに柱があるのは仕方ないのだろうが、柱とブロックが重ならないようにできるはず」と指摘した。

どうすれば転落事故は防げるのか。「周りの人が『大丈夫ですか』と声を掛けるだけで防げる。声掛けできる人が増えてほしい」



宮崎に障害者雇用企業 全日空グループ

読売新聞 2016年08月17日

全日空グループで障害者雇用などに取り組む「ANAウイングフェローズ・ヴィ王子」（東京、遠藤達哉社長）が宮崎市青島に10月、「ANA青島ファクトリー」を設けることになり、県庁で立地協定書の調印式が行われた。

同社は社員258人中、障害者が209人を占めており、制服などの貸与品管理やパン製造、コンビニ事業などを行っている。

今回、長年就航している宮崎で、新規事業として取り組む。ANAホリディ・イン・リ

ゾート宮崎に和紙などの「紙すきファクトリー」を、こどものくにに「木工ファクトリー」を、計5000万円を投じて整備する。

立地協定書の調印式後、記念撮影に臨む遠藤社長（左から2人目）、河野知事（同3人目）ら

手すき和紙、リサイクル紙の製作を行うほか、名刺・カレンダーをはじめとする紙製品や、飛行機模型などの木工製品の製作・販売を行う。将来は紙すきなどの体験事業も計画している。

初年度の2016年度は3人を採用。20年度までに、県内の特別支援学校卒業生などの障害者を含む23人を新規に雇用する。売り上げは、初年度200万円、17年度1100万円を見込む。

調印式で遠藤社長は「宮崎発の商品を、青島から世界に発信したい」とあいさつ。河野知事は「障害者も含めた雇用拡大が見込まれており、期待したい」と述べ、戸敷正市長も「宮崎には、紙や木だけでも、魅力的な素材がたくさんある。可能性を広げてほしい」と歓迎した。



藤田保健衛生大「あんしんネット」 医療の安全 地域全体で



中日新聞 2016年8月16日
地域の小規模医療機関も参加して開かれる研修会＝愛知県豊明市の藤田保健衛生大で（同大提供）

藤田保健衛生大（愛知県豊明市）は、近隣の病院や診療所と「藤田あんしんネットワーク」を設立し、地域全体の医療安全向上に取り組んでいる。3月に設立され、7月末までに同市内と周辺の99施設が参加。研修会を通じて大学が蓄積した経験と知恵を地域の診療所などと共有。診療所などで、予期せぬ患者の死亡

事例があった場合、対応を相談しやすい関係づくりを目指す。昨秋に始まった医療事故調査制度にも対応する取り組みとして、注目されている。（室木泰彦）

研修会は4月以降、12回開かれた。テーマは毎回違い、危機管理や危険予知、医薬品使用時のミス防止策、チーム医療での注意点、ジカウイルス感染症対策などと幅広い。

6月上旬には同大で、病院の危機管理をテーマに開催された。同大の担当者によると、コンプライアンス（法令順守）に詳しい教授らが、診療記録を残しておく、医療事故が疑われる場合でも客観的な説明ができ、患者や家族に不信感を与えるリスクを減らせることなどを説明。同大病院から原則、20キロ以内にある病院の医療安全担当のスタッフら15人が聴いた。

研修会は本年度、計30回を計画。近く、大学周辺の20施設も加わる予定だ。担当の職員は「学んだ内容を自分の病院や診療所に持ち帰って、職場で共有してもらいたい」と話す。

同大病院の病床数は1435床。入院患者は年間延べ45万8700人と全国最大規模。患者の死亡も年間約1000件ある。

同大で医療安全の取り組みが本格化したのは、全国で医療事故が相次いだ1999年。医療の質・安全対策部を設け、院内の実態や課題などを把握し、対応策を練ってきた。2010年度からは院内で事例の検討会や調査委員会を開き、死亡事例を検証してきた。

15年度までの6年間で、検討会は130回、調査委は8回、それぞれ開催。安全管理担当者らのミーティングで死亡事例が毎日、幹部らに報告され、緊急事例検討会で確認後、必要があれば院内の検討会や事故調査委で検証。調査委には弁護士や専門医など外部委員が参加し、客観的な検証に努める。

その積み重ねから、同大が重視するのが、現場の記録や、物品やデータの保全だ。緊急

時の役割分担を事前に明確にし、それに必要な人員と機材を確保することも欠かせない。

しかし、そうした備えを診療所などが自前とするのは難しい。同大病院には、地域の診療所の紹介で受診してくる患者も多いため、診療所などを支える連携のあり方を考えてきた。

制度導入後、ネットワーク内での相談はまだないが、同大は24時間の支援態勢を整備。診療所などで死亡事例があった場合、患者の状態を映像で残し、経過を記録した資料を確保する方法を助言したり、作業にスタッフを派遣したりできるようにしている。

医療事故調査制度は、医療機関に死亡事故の第三者機関への報告を義務づけた。ネットワークはこの点でも、診療所などを支援する仕組みとして期待されている。診療所などは、都道府県の医師会や大学病院などに、報告すべきかどうかを相談できる。

ただ、診療所などには顔の見えない医師会担当者などにいきなり相談するのは抵抗感が強いといった声もある。ネットワークでは、大学病院と診療所などのスタッフが研修などで顔を合わす機会が多いため、報告に関する相談がスムーズになるとの期待もある。

参加する牧医院（豊明市）の牧靖典院長（75）＝東名古屋医師会副会長＝は「診療所の医師には心強い。死亡事例が起きると、動揺し戸惑ってしまう。気心知れた相手なら相談しやすい」と語る。

同大副学長の杉岡篤教授（60）＝医学部肝胆膵（すい）外科学講座＝は「長年取り組む私たちも報告を根付かせるのは大変だった。大学の成果と課題を地域で共有しながら、長い目で取り組みたい」と話す。

おたふくかぜ 5年ぶり流行

中日新聞 2016年8月16日

1000人に1人 難聴になる危険性

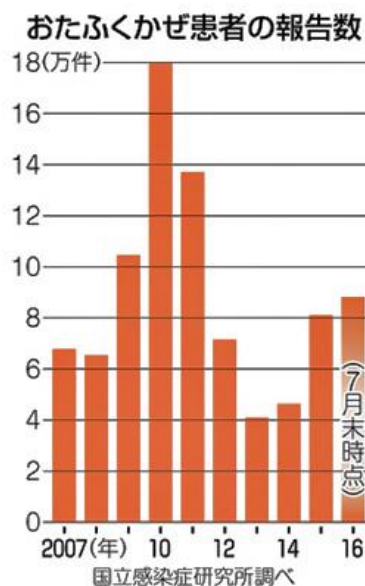
子どもがかかりやすいおたふくかぜ（流行性耳下腺炎）が5年ぶりに流行している。あまり知られていないが、感染すると1000人に1人の割合で難聴になる危険性がある。夏風邪の一種「ヘルパンギーナ」の流行警報も各地で出ており、注意が必要だ。（細川 暁子）

全国の小児科のある医療機関から国立感染症研究所（感染研）に報告されたおたふくかぜの患者数は、前回流行した2010～11年にかけてと同水準で推移。7月末までの今年の患者数は8万8120人と、すでに昨年1年間の累積数を超えた。7月25～31日の1医療機関あたりの患者報告数は1.31人で、過去5年間の同時期平均より多い。都道府県別では富山2.62人、長野1.7人、神奈川1.54人などで平均を上回っている。

おたふくかぜはムンプスウイルスに感染することで発症する。潜伏期間が2～3週間と長く、耳の付け根からあごにかけて耳下腺や顎下（がっか）腺などが腫れて熱が出る。通常は2週間程度で治るが、怖いのは合併症だ。髄膜炎や脳炎を発症したり、1000人に1人の割合で難聴になったりする。難聴は片耳だけのことが多いが、両耳ともなるケースもある。感染研感染症疫学センターの多屋馨子（けいこ）室長は「難聴になることはあまり知られていない。おたふくかぜを侮ってはいけない」と話す。

多屋馨子室長

患者のほとんどは子どもだが、大人がかかると39度を超える高熱が続くこともあり、精巣炎や卵巣炎を合併する場合もある。



1989年から麻疹（はしか）、おたふくかぜ、風疹の混合（MMR）ワクチンが定期接種で使われていたが、おたふくかぜワクチンの成分による髄膜炎が多く報告されたことから93年に中止された。現在は任意接種でおたふくかぜ単独ワクチンが使われている。子どもが1歳になった時に1回、就学前に2回目を接種するのが一般的だ。1回接種で約9割に発症を防ぐ抗体ができるとされる。

ワクチン接種の副作用で髄膜炎になるのは数千人に1人ほど。接種して数週間後に発熱や吐き気などの症状があれば受診する。多屋室長は「副反応はゼロではない。しかし、自然感染で難聴や髄膜炎になる頻度はワクチンより高い。正しく理解して予防接種を受けてほしい」と話す。

夏風邪「ヘルパンギーナ」警報

主に乳幼児が感染する「ヘルパンギーナ」も各地で流行している。感染研によると、7月25～31日の1医療機関あたりの患者報告数は3.85人。埼玉7.12人、栃木6.58人、東京6.17人など、特に関東を中心に警報レベルの「6」を超えている。

ヘルパンギーナはエンテロウイルスに感染することで発症。38度以上の急な発熱があり、のどにできた水ぶくれが破れてただれ痛みを伴う。乳幼児に多く、高熱とどの痛みで水分摂取量が減るため、脱水症状に注意が必要だ。会話などで飛び散るしぶきや鼻水、便などから口を介して感染する。ワクチンはなく、手洗いなどで予防する。

筋ジストロフィーの詩人 岩崎航の航海日誌

緊急寄稿：つなげたい 社会のなかでともに生きる灯火 読売新聞 2016年8月17日

【ヨミドクター編集部より】相模原の障害者施設殺傷事件を受けて、岩崎航さんが、既にご利用していた原稿とは別に、この事件についての思いを緊急に送っていただきました。更新日の本日17日にはこの緊急寄稿を掲載し、本来の連載2回目は1週間後の24日に掲載します。

7月26日、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で暮らす重度の障害を持つ入所者19人が、残忍な凶行により命を奪われ、入所者と職員をあわせ27人が負傷する事件が起きました。

亡くなられた方のご冥福を祈るとともに、心身に深い傷を負われた方の一日も早いご回復を祈ります。



この事件に心を痛め、自身も体調を崩しながら寄稿してくれた岩崎さん

身動きできず、逃げることも抵抗することもままならないなか、命を奪われ、傷つけられた方の痛みと恐怖はいかばかりだったのでしょうか。思いを寄せるたびに身が震えます。ご家族、園で暮らしの時間をともにしていた他の入所者、ケアにあたっていた職員、身近な関係者の悲しみと心痛を思うといたたまれません。

報道によれば、容疑者は障害者への強い差別感情があり、「障害者是不幸しか作

れない。社会からいなくなればいい」と著しく偏った考えに突き動かされ、犯行に及んだと伝えられています。

私はとてつもない恐怖を感じました。障害者が生きること自体を、真っ向から否定されたのと同じだからです。目の前が深い闇に閉ざされるような気持ちになりました。

人間の幸不幸は、障害の有無だけでは決まらない

だいぶ以前から感じていたことで、詩に書いたこともあります。広く人びとの間に、「管

をつけてまで、寝たきりになってまで、そこまで重い病気や障害を持ってまで、生きてい
てもしかたがない」という貧しい社会通念があるのではないのでしょうか。容疑者が「障害
者はいないほうがいい」と考えて暴走したこと、事件後、その考え方に一理あると共感し
てしまう人たちがいることも、その通念の根深さがあらわれていると思います。

自分の命を全うし、その人固有の人生を生きることは、一定の基準のもとに個人や社会
から、条件つきで認めてもらうものではありません。寝たきりかどうか。判断能力やコミ
ュニケーション能力がどれくらいあるか。そんなことで人の生き死にを先取りして、勝手
に決めつけられてはならないと思います。

考えてみれば自然のことですが、生きていれば、人はどこかで必ず病気になったり、障
害を持ったりします。不慮の事故などで突然に亡くなったりしないかぎり、誰もが経験し
ます。

健常者の生と、障害者の生とを切り分けて見ようとせず、人が生きるなかで障害があっ
たりなかったりすると捉えれば、我がこととして、病気や障害を持って生きることを考え
られるのではないのでしょうか。

私は若い頃の一時期、「病気をもち障害のある状態で生きていても自分の幸せはない」と
絶望して、自殺願望を抱いていたことがありました。命をないがしろに扱う点では、自分
自身を生きていても仕方ない人間だと位置づけるのと、他人のことを生きていても仕方な
い決めつけるのとは、この事件のもとになった発想に重なる危うさがあります。

「死んでしまったほうがまだ」と思い込んでいたその頃より更に病状が進み、障害は
重度化している40歳の今、自分を不幸だとは思っていません。生活の中、人と人との関
わり合いの中で、幸せを感じる瞬間もたびたびあります。早まって死なずにいて良かった
と思います。人間の幸不幸は、心身の障害の有無だけで決まってしまうほど、単純な話で
はないというのが私の実感です。



自分の命と人生を他者とともに生きる

病気や障害を持って生きるためには、
生活を支えるための介護と医療の手助け
と、血の通った人と人との日常的な関わり
合いが必要です。もしそれがほとんど
得られない状況に置かれ続けていたの
なら、おそらく、私は生きたいと思えな
いでしょう。

1日中ベッドにいる岩崎さんに、庭に咲いた花
の写真を母の博子さんが見せて談笑する

庭に咲いた小さな花をスマホで写し、
笑顔で見せてくれる母がいます。息子の

活動を喜んでくれる父がいます。同じ病を生き、いつも力づけてくれる兄がいます。常に
気にかけて応援してくれる姉夫婦がいます。どんなことでも話し合える親しい人や、珈琲を
飲みながら何となく雑談できる人がいます。的確な介助で毎日を支えるヘルパーさん。連
携したチームで在宅医療を提供する医師、看護師、理学療法士、薬剤師、人工呼吸器の担
当者。介護ベッドや車いすなど福祉用具の担当者、相談支援のワーカーなど、多くの人と
の関わりがあってこそ、私は社会の中で生きていけるのです。

介護ベッドの上で毎日生きる人に

絶えずもっとも必要なのは

「やあ こんにちは」って

訪ねてくる

医師であり看護師であり

療法士であり

ヘルパーであり

友だちであり、恋人であり、家族であり 暮らしの時間をともにする人だ

事件を知って間もない頃、恐怖と悲しみに暗い気持ちを抱えていた時、親しい友人が私の気持ちに耳を傾けながら、話してくれた言葉が心に残っています。

「私の母や姉も『岩崎さんがこの事件を知って、とても辛い思いをしているのではないかな』と心配していたよ」というのです。

友人を通して間接的に知っているだけで、会ったことも話したこともないお二人です。それなのにこうして心を寄せて気遣ってくれる。その事実に触れたとき、私は心強い気持ちが湧いてきました。おそらく少なくない人が、友人の親子が私を思ってくれていたように、血縁の有無も、遠いつながり近いつながりも問うことなく、重い障害を持って生きる身近な人たちに思いを馳せて心配する光景が、それこそ無数にあったに違いないと直感したからです。

私はサン＝テグジュペリのエッセイ集『人間の土地』の序文が胸に浮かびました。童話『星の王子さま』の作者でもあるサン＝テグジュペリは、ナチズムと闘った作家、パイロットとしても知られています。序文は、初めての夜間飛行中に眺めた街の光景から感じとった、人と人との心を通わせて生きる営みの素晴らしさを書いたものです。一部、引用します。

それは、星かげのように、平野のそこそこに、ともしびばかりが輝く暗夜だった。

あのともしびの一つ一つは、見わたすかぎり一面の闇の大海原の中にも、なお人間の心という奇蹟が存在することを示していた。(中略) 努めなければならないのは、自分を完成することだ。試みなければならないのは、山野のあいだに、ぼつりぼつりと光っているあのともしびたちと、心を通じあうことだ。

サン＝テグジュペリ (堀口大 訳) 『人間の土地』 / 新潮文庫

ここでいう「自分を完成すること」「ともしびたちと、心を通じあうこと」とは、ひとりひとりが自分の命と人生を他者とともに生きることです。目の前を闇に包まれて、暗澹たる思いに打ちひしがれても、目と耳は塞がずにいようと思えます。心を閉ざさずにいようと思えます。障害がある人もない人も、社会のなかでともに生きる光は世界中に灯っている。私もその灯火をつなげていく一人でありたいと願っています。



大気を呼吸すること
体に栄養を取り入れること
トイレに行くこと
自宅に住まうこと
おしゃべりすること
珈琲を飲み、酒を飲むこと
外に出かけること
あだこうだと仕事すること
愛すること
つながりあって
人々の中で生きて死ぬこと
それを人間らしく望んでいるだけだ

写真：富田大介

岩崎 航 (いわさき・わたる)

1976年、仙台市生まれ。本名は岩崎稔。3歳ごろ、筋ジストロフィーを発症する。現在は胃瘻と人工呼吸器を使用し、仙台市内の自宅で両親と暮らす。25歳から詩作を始め、2013年、詩集『点滴ポール

生き抜くという旗印』、15年、エッセイ集『日付の大きいカレンダー』（共にナナログ社）を出版。16年、創作の日々がNHKのETV特集で全国放送され、話題を集める。公式ブログ「航のSKY NOTE」で新作を発表中。

働き気づく 中小の魅力 読売新聞 2016年08月17日

◇府、就業体験支援サイト

府が大学生のインターンシップ（就業体験）支援に力を入れている。知名度のある大手企業に関心が向きがちな学生に、府内の中小企業の魅力をアピールし、人材確保を後押しするのが狙い。昨年9月に専用サイトを開設し、これまでに約140人をインターンシップに送り出したが、受け入れが一部の企業、業種に偏るなどの課題も出ている。（升田祥太郎）

7月下旬、宇治市の障害者支援施設。園芸用のわらづくりに取り組む利用者を、京都女子大3年の岡埜有紗さん（20）がサポートしていた。

岡埜さんは、府の運営サイト「京都インターンシップナビ」を通じて参加を申し込んだ。「やりたいことが見つからず、就職活動前に何かしておきたいと思った」といい、就業体験できる企業を探す過程で福祉関係の仕事に興味を持つようになった。3日間で生活介護や障害児支援などを経験し、「視野が広がった」と笑顔を見せた。

サイトには、7月時点で府内123の企業・団体が登録。大学1～4年生まで、年間を通じてインターンシップを受け入れる企業を検索できるほか、専任の職員が就職に関する相談に応じる。期間は1～5日間と比較的短期の設定で、「気軽に参加できる」（府総合就業支援室）のが特徴だ。

企業側にとっても、少ない負担で学生に自社の特長を知ってもらえる利点がある。登録する宇治市の半導体メーカーの人事担当者は、「B to B（企業向け取引）企業であまり学生に知られていないだけに、インターンを積極的に活用したい」と話す。

若者流出に歯止め

売り手市場に加え、大手企業を中心とした採用活動の前倒しで、府内の中小企業は採用難に苦しんでいる。

京都労働局によると、今春、府内の大学を卒業した学生の就職内定率（4月時点）は前年同月比1・0ポイント増の94・9%に上り、2010年の調査開始以来、最高だった。一方、京都商工会議所が京都市内の中小企業130社から回答を得たアンケートでは、直近3年間の新卒採用で31%が「人材を確保できなかった」と回答し、このうち14%は「応募がなかった」とした。

府にとっては、インターンシップで府内の学生に地元就職を促し、若者の流出を食い止めたい考えだが、課題も残る。

登録123社のうち、今年7月末までの11か月間で実際に受け入れたのは6割程度。中でも「医療・福祉」の業種は登録39社のうち3社にとどまった。人手不足で受け入れ態勢が整わない企業もあるといい、府の担当者は「企業側へのサポートを強化し、多くの学生が参加できる受け皿を作りたい」としている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

